

当事者研究と実験科学

熊谷 晋一郎 (Shinichiro Kumagaya)
東京大学・先端科学技術研究センター

当事者研究とは、地域で暮らすなかで当事者が直面するさまざまな困難を、似た困難を共有する仲間や支援者と連携しながら「研究」という視点から捉え、生きていく術を当事者自身で生み出していこうとする取り組みである。北海道の浦河にある「べてるの家」において、精神障害を持った人々の間で始まった当事者研究は、現在では依存症、認知症など、様々な当事者団体でその意義が注目され、広まりつつある。本発表では「研究」という営みと「回復」という現象の内在的な関係について述べた後に、当事者研究を補強するような形で、経験的科学の方法を接続しようという私たちの取り組みについて紹介する。

研究とはさしあたり、真なる知識を得ようとする実践と定式化することができるだろう。宇宙物理学は宇宙に関する真なる知識を探究し、社会学は社会的事実に関する真なる知識を探究する、というように、それぞれの研究分野は、研究対象の違いによっても区別することができる。では当事者研究は、何を対象にした真なる知識を得ようとする実践だろうか。この問いに対する暫定的な答えを、次のように置くことにする。「当事者研究とは、自己の経験や、経験の記憶に関する真なる知識を得ようとする実践である。」先行研究には、自分の経験に関する知識の総体である自伝的知識基盤 (Autobiographical knowledge base: AKB) や、そのつど想起された自分の経験に関する記憶である自伝的記憶 (Autobiographical memory: AM) についての豊富な研究蓄積がある。これらの先行研究で使用された語彙を使って当事者研究の定義を再度言い直すとしたら、次のようになるだろう。「当事者研究とは、真なる自己の AKB を得ようとする実践である。」

AKBに限らず、およそあらゆる人間の知識というものは、それがどれくらい真理を反映しているか、という観点から評価される。真理を巡る哲学的な議論 (真理論) の中では、ある命題的知識が真であるか、偽であるかが、何によって決められるのかについて、議論が重ねられてきた。たとえば整合説では、既に獲得された知識体系と、新しく獲得された知識を関連付け、新しい知識が知識体系と整合的な場合に、知識が真理であるとされ (mechanistically coherent)、対応説では、知識と現実が対応している知識が真理であるとされる (correspondent)。いっぽう合意説では、知識以前にあらかじめ現実というものが存在しているという対応説の前提を退け、複数の人々の間で合意された知識が真理であるとされ (consensus)、有用説では、生にとって実用的な知識を真理とみなされる (cost-benefit/ teologically coherent)。

ここでこの4つの説を、真理を巡る理論としてではなく、真理を求める生の複数の

傾向性を記述したものと再解釈することで、真理論を生命論に翻訳してみる¹。人間が持つ知識の1つであるAKBについても、以上の4つの条件に拘束されている。しかし、人生の中ではAKBが、上記の4条件から大きく逸脱する、いわば非平衡な場合もある。AKBに関する先行研究や当事者研究をふまえると、現実との接点を失った思考や体験 (correspondence ↓ consensus ↓)、身体的痛み (prediction error ↑)、他者とのつながりの喪失 (consensus ↓)、未来への見通しのつかなさ (uncertainty) などが、この逸脱によって引き起こされていると捉えることができる。だとするならば、真なるAKBを目指した「研究」が、苦悩の緩和にもまた役に立つ可能性がある。また加えて重要なのは、当事者研究における回復という平衡点は、必ずしも多数派とのconsensus条件が優先されるのではなく、少数派同士のメンタライジング空間において生起するalternativeな平衡点であるかもしれないという点である。我々は当事者研究によって、AKB/AMの構造や、それに関連しているといわれる様々な精神的well-being、安静時の脳の機能的結合などが変化しうるかどうかを検討中である。

また、当事者研究が4条件を満たすような自伝的知識を構築することを担保するためには、どのような方法をとるべきかについても考えなくてはならない。近年は、「当事者研究の研究」という標語のもと、当事者研究の方法に関する研究も始まっている。たとえば2013年8月9日に北海道浦河町で行われた、第10回全国当事者研究交流集会では、「当事者研究の研究!!」という全体テーマの下、多くの研究グループが、研究の進め方に関する研究報告を行った。また、発達障害者による当事者研究会 (Necco 当事者研究会) を主宰している綾屋は、エスノメソドロジー・会話分析や、自伝的記憶研究、質問紙票調査の手法を組み合わせ、研究会の場面がどのように組織されており、それによって個々のメンバーの語りの内容がどのように影響を受けるかについて、検討を始めている。

一方で、当事者研究が他の研究分野と同様、真なる知識を目指す実践であるなら、その研究内容が学術的意義を持ちうることもまた、自明である。我々は2012年から、文部科学省からの科学研究費助成事業である新学術領域研究「構成論的発達科学—胎児からの発達原理の解明に基づく発達障害のシステムの理解」(研究課題番号: 24119001) という研究プロジェクトに参加している。このプロジェクトは、構成論、医学、心理学、脳神経科学、当事者研究が密に協働して、発達の原理や、発達障害の解明を目指すことを目的としている。その意味では、神経現象学というプロジェクトのなかで現象学が引き受けていた役割を、当事者研究が引き受けようとした新たな取り組みといえるだろう。本発表では、当事者研究で見出された仮説を、実験科学の専門家が実験デザインに変換し、その実験環境を当事者研究者がアセスメントし、結果の解釈を実験科学と当事者研究が協働で行う様子や、当事者研究の中で出てきた発言をアンケート用紙に変換し、より多くの当事者に傾向を調べようという研究、当事者研究と工学研究の協働で支援機器を作るプロジェクトなどを紹介する。

¹ 予測的知識と感覚信号の誤差の最小化条件 (対応説)、知識体系の整合性条件 (整合説)、目的論的・コスト的拘束条件 (有用説) の三つについては、それを統一的に記述したものとして Friston の自由エネルギー原理を援用できるかもしれない。合意説については、メタ認知やメンタライジングに関する記述を接ぎ木する必要があるだろう。